

地震という文字

柴田 明德

1. はじめに

地震は、様々な顔を持つ不思議な現象である。私たちの住む大地の一部が応力を受けて破壊し、複雑な振動が発生して八方に伝播し、時には甚だしい災厄を齎す。それは、理学者にとっては、物理学の真理を追究する対象であり、工学者にとっては、構造物に作用する複雑極まりない外力であり、人文・社会学者にとっては、非日常的な衝撃による社会生活の混乱と回復の過程である。

人は、重要な事柄、ぜひ伝えたい事柄、強い印象などを定着して記録・表現しようとし、また、事柄の由来・筋道を説明・理解しようとする。そこに「文字」が生まれ、「思考」が生まれ、「論理」が生まれる。そして、さまざまな「言語」と「文化」の体系が、地域の制約のもとで、長い時間をかけて育ってきた。我々の文化は、「やまとことば」と「漢字」の併用（音・訓を合せ用いる独特の融合システム）がその基盤である。近代になって「科学」がもう一つの基盤として加わり、更に「様々な外国の言語と文化」との相互的交流が不可避の世界になった。文化の形態、人と人の関係も、電子ネットの劇的発展などでどんな変化をしてゆくのか、予想もつかない。

しかし、何事も足元が肝心である。我々が、耐震工学を学ぶ際にも、時々、文化の基本である「言葉」と「文字」に立ち戻って考えてみることは、現象を広く、様々な角度から眺めるという意味で面白いのではないだろうか。

わが国の学問は「漢字」に大きく支えられて発展してきた。近代以前はもちろん、近代以後の科学の発展も漢語による概念表現なくしてその成立はなかったであろう。

漢字の面白さとすごさを知るための極めて適切な入門書として、白川静博士の「常用字解」（平凡社、2003年）がある。白川静は明治43年（1910）の生まれで、尋常小学校を出た後、大阪の広瀬徳蔵という代議士の所へ住み込みで修行をし、学問を志して夜間の商業高校から立命館に進み、立命館大教授となる。漢字研究の第一人者で、ライフワークの「字統」（1984）、「字訓」（1987）、「字通」（1996）（いずれも平凡社）は、漢字学研究の金字塔である。そのエッセンスをわかりやすく示して下さったのが、「常用字解」である。常用漢字表にある1945文字について、中・高校生を対象とした興味尽きない説明が述べられており、2940円で白川学入門できる。（2006年には「人名字解」（983字）も出ている。）

白川博士は、先月10月30日に96歳で亡くなられた。90歳を過ぎても、一般の人々に2時間の漢字の講義を立ったままでされていたという。

ここでは、我々になじみの深い幾つかの言葉や文字の由来を、「常用字解」によって調べてみよう。

2. 「地震」

「地震」という言葉は、日本書紀の允恭 5 年（416 年）に「地震」とあるのが最初である。「ない」は地震を表す古語（雅語）で、新編大言海（昭和 31 年、大槻文彦、言海 明治 24 年、大言海 昭和 7 年）には、“「根揺」の約轉と云う”とある。日葡辞書（1603 年に日本イエズス会により出版されたポルトガル語の説明を付した日本語辞書）には、“Gixin. ギシン（地震）Chi furu（地震ふ）^U大地が震動すること、すなわち、地震 Gixinga suru（地震がする）大地が震動する。”とある。漢字の音読みが日常語になっていたようである。

では、地震という文字は「常用字解」でどう説明されているだろうか。引用を後の頁に示してある。

「地」は、もともと神の降り立つ所という意味を持っていたようである。

「震」は、音符が辰（しん）で、はまぐりが足を出している形で動くの意味があり、上の雨かんむりは雨、水に関する天体現象を表し、かみなりがとどろくの意味から、ふるう、ふるえるの意味になった。

3. 「構造」

「構」は、同じ形の飾り紐を上下につなぎ合わせた形で、組み合わせるの意味になる。部材を組み合わせる骨組を作る感じが、もとの字形をみるとよくわかる。

「造」は、告が神に祈りを捧げる意味であり（木の小枝に口（）さい、神への祈りの文である祝詞を入れる器の形）をつけた形）、しんにゆうは歩く・行くの意味で、廟に行ってお参りすることを表す。建築に地鎮祭や完成式があるのも頷ける。

4. 「振動」

「振」は、震と同じく音符が辰で、はまぐりなど貝が足を出して動いている形で動くの意味がある。手で動かすことから、ふるうの意味になる。

「動」は、音符が童（どう）で、目の上に入れ墨をした奴隷の意味があり、これが力（すき）を持ってはたらく、体をうごかす、うごくという意味になる。くわで耕すのもそういえば周期的運動、定常振動である。

5. むすび

「建築」を「常用字解」で調べてみると、建築がもともと都市計画と地盤工学からきていることがわかる。自分の名前を調べてみるのも面白い。そんな好奇心から、新しい関心の世界が広がるかもしれない。

白川漢字学は、甲骨文字・金文の研究を基に、漢字がその時代の社会的儀礼・呪術儀礼の実際に即して生まれたものであることを明らかにした。（さい）の発見）

また、白川博士は、常用漢字 2000 字の規制に縛られることは文化の断絶につながり、容易ならぬ事態になろうと述べている。「字統」は 6800 字、「説文解字」（参考 1）は 9353 字を含む。我々は、一体何字位を知っているだろうか、また知っていたほうがよいだろうか。（新聞も最近では“ら致問題”ではなく、“拉致問題”である。）

皆が科学と文化の両方を楽しむことで、21 世紀的日本が開花することを願うものである。

地

6画

チ・ジ(ヂ)
とち・つち

𡗗

金文1

𡗗

金文2

地

篆文1

陸

篆文2

解説 形声。音符は也。也に池(いけ)・馳(はせる)の音がある。もとの字は墜(墜)に作り、隊(隊)と土とを組み合わせた形。隊は自(卩)。もとの形は彳で、神が天に降り降りするときに使う神の梯の形)の前に、犠牲(いけにえ)の獣である豕をおく形で、神の降りたつところを示す。土は土を饅頭形にまるめて台上におく形で、それを土地の神とする。墜は神の降りたつところに土地の神を祭り、神の降りたつところという意味であった。墜がのち墜落(おちること)の意味となり、墜に代わる形声の字として地が作られた。地は「とち、つち、ところ」などの意味に用いる。

用例 地価 土地の価格 / 地表 地球の表面。土地の表面 / 地霊 大地の精霊 / 地面 土地の表面。また、所有・利用の対象としての土地 / 地元 自分の住んでいる土地。また、その人やその事に直接関係のある土地 / 産地 品物を産出する土地

震

15画

シン
ふるう・ふるえる・かみなり・おどろく

震

篆文1

解説 形声。音符は辰。辰は蜃(はまぐり)のもとの字で、はまぐりなどの貝が足を出して動いている形で、動くの意味がある。「説文」十二下に「劈歴(雷鳴)、物を振はす者なり」とあり、かみなりのとどろきの意味とする。甲骨文字に歷という字があり、「茲の邑(村)に歴すること亡きか」「今夕、自(師。軍隊)は歴すること亡きか」のように、地震や震驚(何かの突発的な事件に驚くこと)のことが無いかと占っている。蜃の肉に靈威の力があるという信仰があったのであろうと思われる。もとは「かみなり、かみなりがとどろく」の意味であったが、かみなりのとどろきによって「ふるう、ふるえる」の意味となり、のちすべて人や物が「ふるう、ふるえる」の意味となり、「おどろく、おののく」の意味にも用いる。

用例 震恐 ふるえ恐れること / 震怒 激しく怒ること / 震動 ふるえ動くこと / 震慄 おそれおののくこと / 余震 大地震のあとに起こる地震。ゆりかえし

構

14画

(構)

14画

コウ
かまえる・かまう・しくむ・つくる

構

金文1

解説 形声。もとの字は構に作り、音符は構。構は同じ形の飾り紐を上下に繋ぎ合わせた形で、組み合わせるの意味がある。木材を組み合わせてものをつくることを構といい、「つくる、しくむ、かまえる、くむ、くみあわせる」の意味となる。

用例 構陷 しくんで罪におとしいれること / 構成 組織・理論などを組み立てること。また、組み立て / 構想 考えを組み立て、まとめあげること / 構造 全体のしくみ / 構築 組み立てて築くこと

造

10画

(造)

11画

ゾウ(ザウ)
つくる・いたる

𨾏

金文1

𨾏

金文2

𨾏

金文3

𨾏

古文1

𨾏

篆文1

解説 会意。もとの字は𨾏・𨾏・𨾏に作り、𨾏は舟と告(告)とを組み合わせた形。舟は盤の形。告は木の小枝に𨾏(神への祈りの文である祝詞を入れる器)をつけて神前に掲げ、神に祈ることをいう。𨾏に供え物を入れて神に薦め、祭ることを𨾏という。𨾏は祖先を祭る廟(一)の前でその儀礼を行うことを示し、𨾏は廟にお参りしてその儀礼を行うことを示す。それで古くは「いたる」とよみ、廟にお参りすることをいう。造は𨾏の一部を省略した字形である。𨾏は神霊が天から降下することをいい、いたるの意味がある。学問・芸術などについての知識や技量が奥深いところまで達していることを造詣という。金文には「終に用て徳を造す」のように「なす、なすとげる」の意味に用いている。また「新造(𨾏)の貯」(新しく造った蔵)のように、「つくる」の意味にも用いている。造は「いたる、なす、つくる」の意味に用いる。

用例 造宮 神社・寺院などを建てること / 造花紙・布などで花を作ること。つくりばな / 造形・造型 形のあるものを作ること / 造成 つくりあげること / 改造 作り直すこと / 偽造 貨幣などのにせ物をつくること

振

10画

シン
ふる・ふるう・すくう

振

篆文1

解説 形声。音符は辰。辰は蜃（はまぐり）のもとの字で、はまぐりなどの貝が足を出して動いている形で、動くの意味がある。手でゆり動かすことを振といい、「ふる、ふるう」の意味となる。物をゆり動かすの意味から、心をゆり動かして勇みたせる、はげますの意味にも用いる。また振（すくう）と通用して「すくう」の意味にも用いる。国語では身なりのこと、また舞曲の動きを「振り」という。

用例 振救・振窮 財を与えて、貧困などから救うこと。振救／振興 物事が盛んになるようにすること／振動 ゆれ動くこと／不振 勢い・景気・業績・成績などがよくないこと

動

11画

ドウ
うごく・うごかす

動

金文1

動

篆文1

解説 形声。音符は重。もとの字は童（童）に従い、音符は童。金文では童を動の意味に用い、のち力（未の形）をそえて農耕に従事することをいい、「体を動かす、うごかす、うごく、する」の意味となる。童は目の上に入れ墨をするの意味で、受刑者、奴隸的な身分の者をいう。農耕に従事する、はたらくの意味には、のち働の字を使用するが、働はわが国で作られた字である。

用例 動作 体の動き。たちいふるまい／動静 物事の動き。様子／動転・動顛 びっくりして落ち着きを失うこと／動乱 世の中が乱れさわぐこと／言動 言語と行動

参考 1 :

「六書」(りくしょ)について

漢字が生まれたのは、今からほぼ 3300 年前(紀元前 1300 年ごろ)の殷の時代である。その時代の甲骨文字が発見され、世に知られるようになったのは、1899 年で約 100 年前である。また、殷末の紀元前 1000 年ごろからの、青銅器に鑄込まれた文字を金文という。甲骨文に用いられている文字は約 5000 字、解読できるものはほぼ 2000 字、金文に用いられている文字はほぼ 4000 字、解読できるものは約 2000 字とのことである。

その後、漢字は時代と共に発展して、篆書(秦時代、紀元前 3 世紀～)、隸書(漢時代、1～3 世紀)、草書、行書、楷書(六朝時代、王羲之、4 世紀)の五体が生まれる。

漢字の字形の研究で最も早いのは、後漢の許慎による「説文解字」(せつもんかいじ)(紀元 100 年)である。この中に、六通りの漢字の構成法(六書、六義)が説明されている。すなわち、**象形、指事、会意、形声、転注、仮借**(かしゃ)である。常用字解の各文字の解説の最初に示されているのが、これである。

象形とは、ものの形を写し取ることである。日(太陽の形から)・月(三日月の形から)などがこの例である。

指事とは、事物の関係を示すものである。上(掌の上に指事の点)・下(掌の下に指事の点)などがこの例である。

会意とは、二つ以上の文字の要素、象形や指事の字を組み合わせ、新しい意味を表すものである。武と信がこの例である。説文では、武は戈(ほこ)を止(とどめる(兵戦をやめさせる)意としているが、白川静はこれは的確ではないとし、戈(か)と止(し、趾(あしあと)の形で、進むの意味がある)を組み合わせた形で、戈(ほこ)を持って進み、戦う時の歩き方であるから、「いさましい」の意味になると述べている。信は、人と言(神への誓いの言葉)を組み合わせた形で、神に誓いを立てた上で、人との間に約束したことを信といい、「まこと」の意味になる。

形声は、音符によってその字の音を表すものである。川や水の関係の文字は 冫 をその字の分類を表す限定符としてつけ、それにその字を表す音符をつける。江・河がこの例であり、江の音符は工(こう)で、古くから長江(揚子江)の意味に用いる。河の音符は可で、黄河の意味に用いる。象形や会意では表し難い山河・鳥虫・草木などの名は、大体この方法で表す。

転注は、意味があまり明らかでないが、同じ音符を持つ多くの字が、その音符の持つ意味と音とを共有する関係であるとされる。

仮借は、字形として表しがたいものを、同じ音の別の字を借りて表すものである。我・余をわれの意味に用い、東・西を方位の意味に用いるのは仮借の用法である。

以上は「常用字解」の巻末の解説による。

参考 2 :

最古の地震の記録は、日本書紀*に允恭**5年(416年)大和付近で、「地震る」(「なみ」の「な」は大地、「ふる」は震動する)とある。

2番目は日本書紀推古7年(599年)の大和の地震被害の記述で、「地動りて舎屋 悉に破たれぬ」とある。

次いで、日本書紀の天武7年(679年)に、「筑紫国、大きに地動る。地裂くること広さ二丈、長さ三千余丈。百姓の舎屋、村毎に多く仆れ壊れたり。」とあり、地表に1km位の断層が現れたことがわかる。

天武13年(684年)には、「大きに地震る。国挙りて男女叫び唱ひて、不知東西ひぬ。即ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官舎、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て数ふべからず。是に由りて、人民及び六蓄、多に死傷はる。」とあり、「土左国の田苑五十余万頃(約12km²)、没れて海と為る。」とある。また、土左国司の言として、「大潮高く騰りて、海水飄蕩ふ。是に由りて、調運ぶ船、多に放れ失せぬ。」とあり、津波を伴う南海トラフ沿いの大地震だったことがわかる。

丸善「理科年表 CD-ROM2003」の「日本のおもな被害地震年代表」から、世紀ごとに被害地震の数を数えてみると次のようになる。

世紀	数	備考
5	1	古墳時代
6	1	
7	2	飛鳥時代
8	6	奈良時代、日本書紀
9	15	平安時代
10	3	
11	7	源氏物語
12	2	源平時代
13	8	鎌倉時代、方丈記
14	7	室町時代
15	9	
16	10	安土桃山時代
17	56	江戸時代
18	66	
19	107	明治時代
20	135	大正、昭和、平成時代

* : 天武天皇の命で編集が開始され、40年余をかけて720年(元正天皇、藤原不比等の時代)に完成。漢文と和文の混合体。

** : 允恭天皇は雄略天皇の父(雄略は、宋書夷蛮伝にみえる倭の五王のうち、最後の倭王武(武は478年、宋に上表)と考えられ、実在が確認される最初の王。)

文献：

- 1) 「字統」1984、平凡社、(漢字の字源の辞典)
- 2) 「字訓」1987、平凡社、(漢字と日本上代語の関係を論じた辞典)
- 3) 「字通」1996、平凡社、(漢和辞典、約 9500 字)
- 4) 「常用字解」2005、平凡社
- 5) 「人名字解」2006、平凡社
- 6) 「別冊太陽 白川静の世界」2001、平凡社
- 7) 「漢字」1970、岩波新書 (740 円)

“はじめにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった」とヨハネ伝福音書にはしるされている。たしかに、はじめにことばがあり、ことばは神であった。しかしことばが神であったのは、人がことばによって神を発見し、神を作り出したからである。ことばが、その数十万年に及ぶ生活を通じて生み出した最も大きな遺産は神話であった。神話の時代には、神話が現実の根拠であり、現実の秩序を支える原理であった。…”

“しかし、古代王朝が成立して、王の権威が現実の秩序の根拠となり、王が現実の秩序者としての地位を占めるようになると、事情は異なってくる。王の権威は、もとより神の媒介者としてのそれであったとしても、権威を築きあげるには、その根拠となるべき事実の証明が必要であった。…”

“この要求にこたえるものとして、文字が生まれた。そしてまたそこから、歴史がはじまるのである。…”

- 8) 「漢字の世界 1, 2」1976、東洋文庫、平凡社
(2003、平凡社ライブラリー、1200 円/冊)

別冊太陽より

